

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

Network

NO.362 2019年

10月号

特集

視覚・聴覚障がいの人たちの、 より彩りある暮らしのために

—情報ユニバーサルを考える

思い立ったがボラ日

新宿区立障害者福祉センター
交流・催しのお手伝い

いいもの みい〜つけた！ vol.21

社会福祉法人はなゆめ
太宰治ファンに人気のグッズ

セルフヘルプという力 第21回

番外編 グループ同士がつながること
セルフヘルプグループ交流会のあゆみ

TVAC News vol.2

地域の居場所づくり調査



新宿区立 障害者福祉センター



コラボしたカフェ「かけはしカフェはこねやま」のようす。
て知ってもらふことを目的とし、皆様の架け橋となるカフェを目指しています。



思い立ったが ジョブ ボラ日

このコーナーでは、毎回一つの団
体取材し、活動内容やそこで
活動するボランティアさんの生
の声をお届けします。

新宿区立障害者福祉センターでは、障がい理解のための、カフェなどのイベントや趣味として、リハビリとして、障がいのある人が楽しく参加できる講座を開催している。講座は陶芸、茶道、パソコン、料理教室、フラダンス・軽体操など多岐にわたる。今回は、講座の中でも人気のある「組みひも」の講座へ「夏の体験ボランティア」（以降、夏ボラ）で参加する学生さんとスタッフに同行させていただいた。

新しい発見と出会い

「組みひもとか楽しそう」「障がいをもっている方のことを知りたい」「家が近いからやってみた」など、夏ボラに参加した動機はそれぞれ。中学生3名とスタッフ1名は、ワクワクしながらセンターに集合した。まずは体験の説明を受け、見学。講座参加者は、脳血管疾患の後遺症や視覚・聴覚障



特別な道具（丸台）を使った組みひも体験のようす。

がいないなど中途障がいの方が多いとのこと。みなさん、夏ボラで体験に来る方々との交流を毎年楽しみにしているようだ。障がいによって片手で作る方法があること、作る速さや力が一人ひとり異なるため、組み方を工夫していることなど、丁寧な説明を受けた。体験者は、片手で作る利用者さんの組みひもをキラキラした眼差しで見つめ、熱心に説明を聞いていた。

自分らしい組みひも

夏ボラ参加者も「組みひも」を作らせていただいた。組みひもは、ストラップやアクセサリー、帯紐などになるが、糸の配置や色によって、できあがる模様も形状もさまざま。作り始めると、真剣な表情で作業に没頭していた。「難しい。集中して無言になっちゃうけど、楽しい」「考えてやるから、時間がすぐ過ぎた」と体験後、感想





カフェでは白杖体験や目隠し輪投げなどの視覚体験コーナーも設けられました。



スターバックスと多様な障害について



組みひもの先生と。

を話してくれた。実際にやってみるとなかなか難しい！「あれ？次は上だっけ、横だっけ…せんせいーい！」という状態。その賑やかな光景をみて、講座参加者の方々も楽しそうに微笑んでいた。今回の体験者たちは口頭で説明を受けていたが、参加者には、わかりやすい手順で書かれた説明書も用意されているとのこと。頭を使い、手先を動かすので、リハビリとしての役割も大きい。障がいの有無を問わずとにかく楽しい。組んだ後は、アクセサリーにして家族にプレゼントすると講座参加者の方が完成後、嬉しそうに話してくれた。ちなみに、夏ボラ体験者が組んだ組みひもは、ストラップにしていたら、素敵なおみやげになった。

他の人に話したくなる体験
体験後のフィードバックでは、体験の感想や質問を話す時間が設けられていた。障がいの者の方と関わる機会が初めてだったという体験者からは、「障がいの者の方を知ることができた」「言語障害の方と交流できてよかった」との声が聞けた。また、施設の方から「体験全体が楽しいものになればいい。足を運んで広めてもらい、障がい理解につながればいい」と夏ボラへの期待も話していただき、体験は終了した。

体験で作ったストラップは、他の人に話さずきっかけになるだろう。その時、経験を感じたことをぜひ話して広めてほしい。体験者や講座参加者の方々、受入団体にとって、夏の楽しい思い出が増えた一日だった。

新宿区立障害者福祉センター

<http://shinjyuku-fukushi-center.org/>

連絡先 〒162-0052
東京都新宿区戸山1丁目22-2
TEL: 03-3232-3711
FAX: 03-3232-3344



次ページでは
活動内容を紹介しています



1日体験してみました！

(夏ボラ×編集部)



2 組みひも作成中。
表情は真剣そのもの。



1 組みひも講座の参加者は15人ほど。
どのような参加者がいるのかなど説明していただきました。



4 糸を巻く作業。
ながーい糸を引っ張りながら
巻いていきます。



3 講座参加の方に
組みひもを
教えてもらいました。
糸の数も多く、複雑！

6 体験終了後のフィードバック。
みなさん、楽しい体験になったようです。



5 自分たちが作った、
おみやげのストラップ。
個性が出てますね。



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

視覚・聴覚障がいの人たちの、 より彩りある暮らしのために —情報ユニバーサルを考える



- 6 希望と夢を実現したバリアフリー映画館！
◇CINEMA Chupki TABATA
- 10 映像のバリアフリーを推進する、MASCの挑戦
◇NPO 法人メディア・アクセス・サポートセンター
- 13 寄稿 音訳ボランティア活動の現状とこれから
—視覚障がい者等の情報保障のために
◇藤田晶子（全国音訳ボランティアネットワーク）
- 15 寄稿 視覚障害者のより暮らしやすい環境をつくるために
—西東京市視覚障害者協会発足への思い
◇青木悠弥（立教大学コミュニティ福祉学部／バリアフリー映画上映会実行委員会代表／西東京市視覚障害者協会理事）
- 17 特別寄稿 ビスケットの家・元気一番館に託す私の夢
◇坂巻熙（社会福祉法人潤沢会理事長／淑徳大学名誉教授／毎日新聞社終身名誉職員）

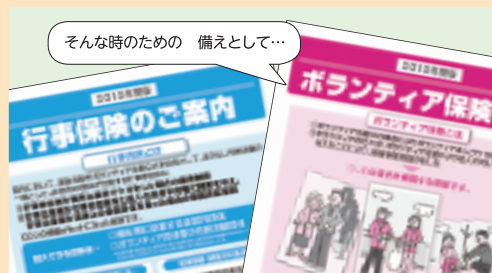
知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに
一歩ふみだすヒントを、ご紹介します。

- 1 思い立ったがボラ日 新宿区立障害者福祉センター／交流・催しのお手伝い
- 21 TVAC News Vol.2 地域の居場所づくり調査
- 22 つぶやきブレイク vol.9 さあ、話し合おう
- 23 セルフヘルプという力 第21回 セルフヘルプグループ交流会のあゆみ
～グループ同士がつながること
- 26 いいものみい～つけた！ vol.21 社会福祉法人 はなゆめ
太宰治ファンに人気のグッズや個性的な小物たち

もしもボランティア活動中に怪我をしたら… 怪我をさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910
FAX. 03-3268-8832
URL. <http://www.tokyo-fk.com/>

視覚・聴覚障がいの人たちの、 より彩りある暮らしのために —情報ユニバーサルを考える



^映画を観る。視覚障がいの人びと。聴覚障がいの人を含め、映画館で映画を楽しむことができるようになった。
写真提供＝NPO 法人メディア・アクセス・サポートセンター

視覚・聴覚障がいに関する市民活動は古くからあり、公的サービスも、他の障がいや疾患の人に比べると、ある程度、整備されてきたと言えるだろう。

しかし、生活の必要最低限がフォローできていればいいというわけではなく、日常で健常者よりも不便を感じることは少なからずある。

進学や資格取得、仕事のキャリアアップ、趣味を広げるなど、“より彩りある暮らし”を得るという次のステップのために、当事者やボランティア・市民活動は進化を続けている。

今号では、活動団体や活動者への取材を通して、その現状と、さらなる未来のカタチを探りたい。

希望と夢を実現したバリアフリー映画館！

CINEMA Chupki TABATA



チュプキの外観。オープンしてまだ3年余りだが、チュプキを探している白杖の人がいると近所の人が声をかけてくれるような、早くも地域に愛される映画館となっている。写真提供＝CINEMA Chupki TABATA

「バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ」ですね。まず、シティ・ライツを始めたきっかけからお聞かせください。

そもそもきっかけは、ある異業種交流会に参加したことです。「夢を持った人集まれ！」という呼びかけで集まり、そこでチャップリンの『街の灯』というサイレント映画を視覚障がいの方に観ていただくという企画ができました。

視覚障がいの方々にリサーチすると、考えていた以上に映画を観ることに興味を持たれていましたが、自分たちには観られないものと諦めていたのです。一方で、すでに海外では公開初日から音声ガイド付きで鑑賞でき、視覚障がいの方がレビューをアップしていました。

ボランティアグループなら企画を実現しやすいと考え、2001年にシティ・ライツを設立しました。団体名は『街の灯』の原題 City Lights から取り、週1回の研究会から始め

20席の小さな映画館。イヤホンをつける、音声の流れってきた。「Aさんが太鼓を運ぶ」画面がモノクロになり、Bさんの家が写る「……映画の音と重ならないように、情景が簡潔に解説される。目を閉じると、スポンジが水を吸収するように音声に耳に沁み込み、脳が映像を想像する。音声ガイドをつけて映画を観たのは初めてだった。北区田端の商店街にある CINEMA Chupki TABATA (シネマ・チュプキ・タバタ。以下、チュプキ)は、誰もが映画を楽しめる日本唯一のユニバーサルシアターとして、全作品が音声ガイド・字幕付きで、車いすスペースや親子鑑賞室ももうけている。代表の平塚千穂子さんにお話をうかがった。

視覚障がいの人たちに映画を届けたい！

——チュプキの運営母体は、視覚障がい者の映画鑑賞をサポートする



「チュプキ」とは、アイヌ語で「自然の光」を意味する。シアターのイメージは“森の中”。
ところどころに、木や緑のぬくもりのあるものが置かれている。ロビーの様子。写真提供=CINEMA Chupki TABATA

ました。メンバーは自主映画の監督
やナレーター、俳優志望の人など7
〜8人です。

——なぜ、映画だったのでしょうか。

当時、私は映画館で働いていて、
映画で人とつながることがやりた
かったのです。

コアメンバーが海外へ行つてし
まったり、視覚障がいの方々が観た
かったのは上映中の作品だったりし
て、『街の灯』の上映は実現しませ
んでしたが、活動は続けました。

音声ガイドは、最初から視覚障が
いの方と一緒につくりようと考えて
いたので、意見交換のしやすいメー
リングリストを立ち上げました。当
事者々に呼びかけると、80人くら
いが集まりました。メーリングリス
トにいただいた投稿の中には、映画鑑
賞の環境づくりに関して気づくこ
とがたくさんありました。

——最初の映画鑑賞は？

シテイ・ライツ設立の年にスタジ
オジブリの『千と千尋の神隠し』と
いう映画が公開されました。すると、
「私の隣で映画を見ながら解説して
ほしい」という要望があり、メーリ

ングリストで発信したら、6人の希
望者がありました。けれども、実況
解説には得手不得手があります。そ
こで、解説が上手な人の声を複数の
人に届けようと、MDレコーダーを
持ち込み、ピンマイクで1人が解説
し、イヤホンを分岐させて8人が聴
くというやり方を試みました。けれ
ども、劇場には事前に了承を得てい
たとはいえ、一般のお客様にご迷惑
をかけてしまうおそれがあるので、
別室で解説しようという話になりま
した。

秋葉原に行き無線機のお店で相
談すると、ミニFM局が使うような
発信機を貸してくれました。映写室
などから映画の解説をする人の声を、
客席にいる方々にも、ラジオのイヤ
ホンで聞くことができるようになった
のです。これは人数制限がなく、
画期的でした。こうした「シアター
同行鑑賞会」を始めると、口コミで
広がって、開始から2〜3年後には
200人ほどの視覚障がいの方々
が集まったこともありました。

鑑賞会は、月1回から週1回と回
数が増えるに従い人数が分散され、
30〜40人くらいに落ち着きました。
すると、鑑賞後に食事会やお茶会を
ひらいて感想を話し合ったり、説明
しきれなかったところを解説するこ



全席で音声ガイドを聞くことができたり、親子で鑑賞できる席もある。スピーカーの音もよく、豊かな時間が過ごせる映画館だ。写真提供=CINEMA Chupki TABATA

とができるようになりました。

——視覚障がいの方の映画鑑賞という企画は実現したのに、なぜ映画館をつくったのでしょうか。

障がいのある方々が上映期間中いつでも映画を観られるようにするには、常設の映画館が必要だと思っただことと、いつか映画館をつくりたいという私の夢があったからです。そのために寄付を夢貯金として貯めていて、ある程度、貯まったところで物件を探しました。

ところが、法の規制がたくさんあり、最初に借りたところは映画館としては使うことができませんでした。たとえば、商業地域にあること、換気システムがきちんとしていること、2階以上の場合には避難ルートとして階段が2系統以上あること、広さによりトイレの数が決まっていること……などです。ただ、月4日以内なら法律に抵触しないので、上映会を続けつつ、映画館になりそうな物件を探し歩きました。諦めかけていた頃、奇跡的にここを見つけたのです。けれども、夢貯金は使い果たしていました。しかも、工事の見積は予想の3倍の金額でした。

——それほど大変な想いをしながらあきらめなかった理由は？

応援してくれた人たちとの約束を果たしたかったからです。広島の新ナマ尾道の存在もありました。『未来の映画館』を作るワークショップに参加した際に、シネマ尾道の支配人がゲスト講師としてやってきました。2700万円の寄付を集めて、閉館した映画館をよみがえらせたというお話を聞いて、背中を押してもらいました。

物件を押さえ、工事は分割払いにしてもらったものの、募金を始めたのが最初の支払いのひと月前。それでも1か月で1000万円、翌月には目標額の1500万円が集まりました。それでも充分ではなかったのですが、スピーカーの設置を音響監督がボランティアでやってくださったったり、アンプやプロジェクターを半額ほどにしてくださいました。多くの方の協力をいただきました。椅子は、ある劇場で新しいものと入れ替えるという情報が入り、無料でいただくことができました。

開館までは綱渡りのような状態でした(笑)。

日本初の ユニバーサルシアターの誕生！

——ようやく映画館ができましたね(笑)。2016年9月にオープンしてから約3年、どのように運営されてきましたか。

障がいのある人のみを対象とした映画館と勘違いしていた方も少なからずいたこともあり、1年目はお客さんがゼロという日もありました。が、1度来ると、リピーターになってくださる方が多いです。視覚・聴覚障がいの方が健常者の人と映画鑑賞したり、健常者の方が抱っこスピーカー^{*1}や音声ガイドを体験されたりと、楽しんでいただいています。ロビーで会った人同士が意気投合して、お茶を飲みに行くなど、自然な交流が生まれることもあります。来場いただくための工夫もしています。たとえば、音声ガイドを有名な声優さんをお願いしたら、ファンの方が来て口コミで広げてくれました。また、音声ガイドで鑑賞のポイントを教えてもらったという健常者のお客さんもいます。音声ガイドや字幕は、抽象的な映画や聞き取りづらい方言を聞くのにも役立ちます。

19時からは、1時間5000円でシアターレンタルもしています。自主制作映画の試写会や演奏会など、自由に使っていただいています。このようにさまざまな楽しみ方をしたいだけで、常設の映画館をつくってよかつたなと思います。

——どのような作品を上映されていますか。

チュプキは小さいし後発の映画館なので、封切館(新作映画を初めて上映する映画館)にはなれませんが、できるだけ旬の新しい作品をお届けしたいと思っています。また、映画ファンの評判やお客様のリクエストなども参考にしながら、スタッフと話し合っ選んでいます。他の作品はメインの作品との組み合わせで考えます。

課題は、DCPというデジタルプロジェクターがないので、その素材でしか上映できない、大手の映画会社の作品を上映できないことです。一方、小さな制作会社の作品ならいかというところ、UDCast(ユーディーキャスト)^{*2}に対応していないものも多いので、月2〜3本は音声ガイドを自作しています。

——今後の目標は？

音声ガイドの普及率はまだ20%未満です。100%にすることが目標ですが、さらには音声ガイドが数種類あつて、それぞれの方の好みに応じて選べるようになるのが理想です。

そのためにも、音声ガイドが映画鑑賞ツールとして、一般の方にも楽しんでいただけるものとして、広がっていくとよいですね。あとは、チュプキのようなユニバーサルシアターが、全国のあちこちで増えていくといいですね。

——バリアフリー映画に関して、何かしたいと思った人ができることはありますか？

直接的なことだと、音声ガイドや字幕づくりですね。チュプキでは音声ガイドの講習会を不定期に開催しています。直近では11月頃の開校を考えています。はじめはボランティアでも、映画が好きなら、面白くついでハマってしまうと思います。

視覚・聴覚障がいの方なら、音声ガイドや字幕のモニターとしてご協力くださったら、よりニーズにあつたものができていくと思いますし、

IT企業の方なら、より良い鑑賞環境を整えるためのソフトウェアの開発を手掛けるなど、興味や専門性を生かして映像バリアフリー化のために考えてくだされば嬉しいです。

*1 抱くタイプのスピーカー。耳の近くで鳴らすので音量を上げなくても聞こえやすく、音の振動を身体で感じる事ができる。

*2 映画や映像、放送などの音声、スマートフォン等の端末と使って、音声ガイドや字幕、手話の表示などを行うことができるアプリケーショ。11ページ参照。



シネマ・チュプキ・タバタ

<http://chupki.jp.org/>

〒114-0013 東京都北区東田端 2-8-4

TEL&FAX 03-6240-8480

映像のバリアフリーを推進する、MASCの挑戦

NPO法人メディアアクセスサポートセンター

日本語が母語なのに、日本語の映画が観られない!?

一瞬、「?」となる話だが、考えれば確かにそうだ。聴覚障がいの人にとっては、字幕のない邦画を楽しむことができない。

メディア・アクセス・サポートセンター(以下、MASC)は、すべての聴覚障がい・視覚障がいの人が自由に映像作品にアクセスし、情報を得ることができるよう、「映像のバリアフリー」をすすめるNPO法人だ。映像のバリアフリーとは? な

ぜそれが必要なのか? それほどのような影響をもたらしているのか?

映像のバリアフリーのさらなる可能性は……? MASCの事務局長、川野浩二さんにうかがった。

「字幕がほしい!」という一人の声をきっかけに

「私たちの活動は、字幕のないDVDに字幕を入れてほしいという一人の聴覚障がい者の声から始まりました」と、開口一番、川野さんは言っ



MASCが開発した
文字起こし・字幕制作・翻訳制作ソフトウェア
「おこ助」。

た。聴覚がいの人にとって、DVDを観るにはバリア(障壁)があった。字幕があればバリアを取り外すことができる。また、視覚障がいの人にとっては、音声ガイドがあればバリアがなくなる。聴覚・視覚障がいの人たちがいつでも映画などの映像を楽しむようにすることが、映像のバリアフリーだ。川野さんは言う。「外国映画を観るときに、字幕版がいいという人と、吹き替え版を選ぶ人がいます。映像のバリアフリーとは、障がい者に限らず、この選択肢を増やすことでもある」

もともと、企業で映像・音声の制作現場にいた川野さんは、障がいがあるために邦画や日本語の映像作品を楽しむことができない人の存在を知り、字幕をつけるために必要な仕組みづくりをしようと2005年、活動をスタートした。

その2年後、『バベル』という映画に対し、字幕を要望する署名活動が起こった。外国のシーンでは字幕があるのに、日本のシーンでは字幕が消えてしまう。しかも、日本の聴覚障がいの人が多く出演しているのに、内容がわからない。署名はひと月で4万筆集まり、大きく報道された。これがきっかけとなり、全上映館で日本語の字幕がついた。

とはいえ、当時はまだフィルムで、すべての映画に字幕をつけるのはコストがかかり過ぎるし、売れる保証もない。そこで、MASCの前身事業で、DVDをパソコンに入るとインターネット配信され、字幕が出てくるというソフトを開発した。「当時は字幕配信に関する送信可能化権をクリアするため多くの労力を必要としました。字幕をつけたいと映画会社に申し出ても拒否されたり、お金を払うよう言われました。字幕をつけて配信するには、日本脚本家連盟、日本シナリオ作家協会、日本文藝家協会、日本映画監督協会、日本音楽著作権協会(JASRAC)の5つをクリアしないと配信できない。それを1作品ずつクリアしていったんです」

しかし、DVDはクリアしても映画館では観られない。川野さんたち



日本語字幕・音声ガイド制作者養成講座の様子。写真提供＝NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター

はNPOを立ち上げ、技術面はMASCで解決していくことになった。普及には映画業界全体の理解が必要で、日本映画製作者連盟が率先して動き、解決に向かった。

2010年、著作権法の改定により障がい者のための著作物利用にかかる権利制限の範囲が拡大した。これにより、映画や放送番組への字幕の付与や手話翻訳など、障がい者の情報利用の機会確保の措置として、幅広い対応が認められるようになった。

MASCができたことで、文化庁、経済産業省、厚生労働省の共同プロジェクトができ、超党派による「障害者の芸術文化振興議員連盟」も設立された。

――進歩する音声ガイドや字幕表示

現在、MASCではおもに4つの事業を行っている。①字幕・音声ガイドの制作、アーカイブ、②日本語字幕・音声ガイド制作者養成、③映像コンテンツに対する情報保障の研究・開発、④映像バリアフリー普及促進事業。

2016年、MASCが開発した「UDCast(ユーザーキャスト)」による音声ガイド対応が全国の映画館

で始まった。UDCastとは、無料で使えるスマートフォン用アプリ。鑑賞する作品の音声ガイドを事前にダウンロードしておき、映画館で立ち上げると、映画本編の音声に合わせてイヤホンから音声ガイドが流れるしくみだ。これにより、全国どここの映画館でも、どの上映回でも楽しむことが可能となった。

字幕については、その翌年より、スマートグラスによる字幕表示対応が始まった。スマートグラスの外見は、少しいかついサングラスという雰囲気。かけてみると、字が浮いて見える。グラスの角度により画面にかららずに字幕を見ることができ、画面についている字幕は、背景と重なって読みづらいことがあるが、スマートグラスならその問題もクリアになる。現在は4館でスマートグラスの貸し出し対応を実施している。持ち込みは全国すべての映画館で可能だが、値段は6万円ほどと高価だ。「手が届く価格になるのは、遠い将来ではないでしょう」と川野さん。

映像のバリアフリーの影響と可能性

「活動のきっかけは、聴覚障がい



スマートグラス。ふつうのメガネと同じようなデザインのものや、片目だけに装着するものなどもある。「1万円代になれば、多くの人が自分のグラスを持てるようになる」と川野さん。写真提供=NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター

意識して機器を開発しても広がりづらい」と川野さんは語る。「その先にエンタメ(エンターテインメント)があるので。スマートグラスでゲームができたり、音声ガイドをコメントリー(解説や実況中継などの音声多重放送)のように利用したり、音声ガイドを立ち上げて恐怖映画を観ると映画にない音やささやき声が聞こえてくるなど、楽しいしくみをつくることもできるんです。また、スマートグラスによる多言語対応が可能になれば、外国の人が日本で邦画を観ることもできます。こういうことは、活動を始めたときから考えてきたことです」

聴覚・視覚障がいの人たちが、家族や友人らと一緒に映画館に行き、いつでも映画を観ることができただけでなく、こうしたエンタメの要素が加わると、映画館へのお客は増え、映画文化も盛んになるだろう。

また、映像のバリアフリーの可能性は映画だけにとどまらない。その一つが、日本語字幕・音声ガイド制作者養成である。養成講座は、より高品質な音声ガイドと字幕の制作・提供を目的としているが、仕事づくりにもつながっている。受講生のなかには制作会社に就職したり、フリーランスとして活躍している人た

ちがいる。ドイツやアメリカでは映画の字幕が義務になっているが、法律の縛りのない日本ではまだ14〜15%なので需要がある。また、自治体でつくっている映像や学校の教材など、まだまだ字幕が普及していない映像もたくさんあるそうだ。フリーランスならば、小さい子どもを抱える一人親、外出が難しい車いすの人なども在宅で働くことができる。

字幕や音声ガイドの技術は本誌編集部が考えていたよりはるかに進んでおり、多くの波及効果があることを知った。そして、その先にある未曾有の活用法を創造してみたい——そう思えたインタビュだった。

**NPO法人
メディア・アクセス・サポートセンター
(略称:MASC)**

<http://npo-masc.org/>

〒151-0061 東京都渋谷区初台 1-51-1

初台センタービル 709 号室

TEL: 03-6300-7762 FAX: 03-4243-2608

Email: info@npo-masc.org

音訳ボランティア活動の現状とこれから

視覚障がい者等の情報保障のために

藤田晶子（全国音訳ボランティアネットワーク）

音訳の難しさ

今、これをお読みくださっているみなさまのなかに、音訳についてご存知の方はどれくらい、いらっしゃるでしょうか。朗読なら知っているけれど、という方がほとんどではないでしょうか。

音訳とは、視覚からの情報が80%以上と言われるなか、活字の出版物等を目で読むことが困難な視覚障がい者（利用者）のために、文字情報を適切に音声に置き換えることです。1957年、ある教会の婦人部が、当時の筑波大学附属盲学校の生徒に、カセットテープで録音したものを提供したことが、音訳の始まりと言われています。

ところで、文字情報を音声に変えるということは、声に出して読める人なら、だれでもできるといような簡単なものではありません。活字で書かれた内容を見えていない人に音声だけで、正しく伝えられる

でしょうか。

そもそも、大部分の活字の本は、音声化されることを予期して書かれていますし、更には、書き言葉というメディアを、音声というメディアに変換するということは、イコーにはなり得ません。

また、点字のように規則に従って正確に打てば、誰が打っても正しい本ができあがるのとは違う難しさもあります。

そして、1冊の本を音訳するには、相当な時間がかかります。早くて3ヶ月、半年はざらで1年以上かかることもあります。

下読みをし、次に下調べ（調査）、いざマイクの前へ。読了後は自身でモニター、続いて第三者が校正し、不具合があれば、音訳者に戻されて読み直しというような過程を経て、ようやく録音図書誕生となるわけです。これ以上早くというのは、無理かもしれません。

視覚障がい者と一言でいっても、

生来の全盲の人、病気や事故で中途で失明した人（中途失明者）、ロービジョンの人（弱視者）に分かれるでしょうか。当然ニーズはさまざまです。

2010年に、「サピエ図書館（電子図書館）」が誕生し、登録すれば、利用者は24時間いつでもダウンロードできるという便利なものができました。

しかし、国立国会図書館の蔵書数は約969万タイトル。「サピエ」の音声データは約9万タイトル（点字データは約19万タイトル）です。また、国内で年間出版されている書籍・雑誌は約8万タイトル、それに対して年間音訳される資料は約7000タイトルです。いうまでもなく圧倒的な情報不足です。

さて、60数年に及ぶ音訳の歴史の中で、その発展を支えてきたのは、家庭の主婦たちでした。自前で録音機材を買い揃え、あちこちの音訳講習会や研修会等に足を運び、日々精

進を重ねて自身のスキルアップに励んできました。

その音訳ボランティアが高齢化し、減少傾向にあります。音訳者の募集をしても、若い人が集まりませんし、育ちません。「こんなに大変なものだとは思わなかった」「ボランティアをする時間があるなら、働きたい」

時代は変わりました。時代は、IT革命からAI革命に移っているそうです。音訳者の代わりにAIが活躍する日が来るのは、そんなに遠いことではないのかもしれませんが。

ボランティアこそネットワーク

それはともかくとして、「情報は、早くなければ情報ではない」という人たちにとって、音訳に頼りきっていては間に合わない現実があります。

特にロービジョンの人のなかには、原本をスキャンし、テキストファイルに変換し、パソコンの音声読み上

げソフトを使って、合成音声で本を読んでいます。

一言で言うなら、こういうことなのですが、これをロービジョンとはいえ、1人でこなすのは、大変なことなのです。ましてや、全盲の人はなおさら、想像を超える苦勞です。出版社がデータを提供してくれればいいだけの話なのですが。

当会でも東日本大震災の直後、高知の利用者からの1本の電話でテキスト化に挑戦。音訳とは違う取り組みに戸惑いつつも、全国の会員が試行錯誤しながら今や、引きもきらない依頼をさばっています。図や表やイラスト、写真がでてきたら、読み上げソフトでは対応できません。私たちが読み原稿を作り、本文中に挿入しないとけません。これは日頃、音訳で培ってきたスキルですから、音訳とは関係のない活動というわけではありません。近年、依頼が確実に増えているにも関わらず、図書館等の取り組みは遅れています。その図書館から、手弁当で活動している当会にテキスト化講習会への講師派遣依頼がきます。フットワークの軽いボランティアにも限度はあります。でも矛盾しているようですが、目先の困っている利用者のことを思えば、頑張るのもボランティアです。

ツールのデジタル化と行政の役割

一方、ここに来てずいぶん法の整備が進んできました。

著作権法の改正、そして読書フリー法の施行と続いています。

音訳ボランティアにとって、著作権がネックとなり、同じように時間も労力も使い製作した録音図書が死蔵されている音訳グループがあります。それが、文化庁長官の指定を受け、国会図書館に納められるようになりました。長年の運動の賜物です。また受益者は、「視覚障害者等」となりました。この「等」の部分は、視覚障がい者のみならず、寝たきりや上肢障がいなどの身体障がい者、学習障がい者が含まれます。正に利用者の拡大ということになります。ここで課題は、目に障がいのない利用者が聴いても違和感のない読みを考

えるべきなのではないでしょうか。点訳から始まり音訳へと続き、今ではテキスト化が重宝されていますが、更には、マルチメディアDAISY(デイジー)というツールがあります。特に学習障がいの子ども達に、今もつとも有効な手立てと言われているのが、このマルチメディアです。

音声とその部分のテキストや画像等がシンクロして出力され、パソコンを使って利用するものです。この音声に関しては、合成音声でも作られていますし、肉声もあります。

せめて小学生くらいまでは、正しく、そして、美しい日本語を子ども達に伝えたいと、音訳者の肉声を使った音源を提供しているものもあります。

このマルチメディアDAISYの製作は、なかなかハードルが高く、製作メンバーも少ないがために、教科書作りに特化されています。それほど無償に近いボランティアです。その上必要なのは、教科書だけでなくありません。優れた児童書や絵本も必要です。そのどちらも、全く足りていません。お粗末な現状であり、まさに文部科学省が対応すべきことでしょう。

更には数年前、ある盲学校の生徒の大学受験に際し、音訳とテキスト化で支援。すでに今は、大学院に進んでいます。支援は続いています。各大学には、学生支援室があるようですが、充分ではないようです。更に本年6月からまた、大学を目指す盲学校生の教材や参考書のテキスト化での支援が始まっています。

地元のボランティアグループや

図書館などで断られ、保護者が必死でサポートしてくれるところを探して、当会にたどり着いたものです。前述の大学院生が卒業した盲学校のいわば、後輩ですが、学校からは、情報の提供はなかったようです。私たちのテキスト化の原点となった、高知の利用者も私たちに会おうまで、あちこちに断られ続けたということでした。

盲学校も各図書館も社会福祉協議会もボランティアも情報を共有し連携しなければ、困難を抱えている利用者に速やかな対応はできません。また、ここに聞けば、視覚障がい者等のことは、すべて解決できるというハブ的な存在が必要ですよ。

最後に、こういう時代ですから、行政にお願いしたいのは、ぜひとも行政の役割として予算化してもらいたいということです。情報保障は、本来、行政のやるべき仕事です。

「読書バリアフリー法」に期待し、絵に描いた餅にならないよう注視していきたいものです。そして、利用者を筆頭に私たちも、視覚障がい者等の現状をどんどん発信していきたいと思ひます。

視覚障がい者のより暮らしやすい環境をつくるために ——西東京市視覚障害者協会発足への思い

青木悠弥（立教大学コミュニティ福祉学部／バリアフリー映画上映会実行委員会代表／西東京市視覚障害者協会理事）

2019年6月30日に、東京都西東京市内の施設で発会式と総会が開催され、東京都盲人福祉協会の市部団体の「西東京市視覚障害者協会」（以下、西視協）が発足しました。今回は私の視点で、当協会の発足について書かせていただきます。

私の生活と携帯型点字情報端末

立教大学コミュニティ福祉学部の学生で、点字使用の視覚障がい者である私は学内の支援制度を利用しながら、晴眼学生と共に講義を受けたりサークル活動を楽しんだりしています。講義中は、学生に配布されるレジュメを読んだりノートを書いたりするために、「携帯型点字情報端末」（以下、点字端末）を外団体から借用しています。このコンピュータは点字ディスプレイの1種で、点字データの読み書きの他、スケジュール帳や電卓などの機能もあ

り、最新機器ではマイクロソフトのワード、エクセル、パワーポイントやPDFデータの閲覧やメールの送受信ができるようなパソコンと同等の機能を利用可能です。このコンピュータによって、予め講義担当の先生からメールでレジュメをいただき、講義中にそれを読みながらノートに書くことができます。

点字端末と西東京市の現状

日本の市区町村では地域生活支援事業の1つとして、日常生活用具給付制度があります。福祉器具は高額なものが多いのですが、この制度を利用して補助を受ければ、利用者の負担を軽減することができます。ただしこの制度の詳細な内容は、自治体によって異なります。私は大学進学を前に、漢字かな交じり文のデータを読むことができる最新の点字端末が必要になりました。しかし、

西東京市の日常生活用具の給付制度では、情報・意思疎通支援用具の点字ディスプレイについて、「18歳以上の視覚障害及び聴覚障害の重度重複障害者」という規定があります（西東京市2017）。

つまり、視覚障害のみで重複障害者に該当しない私は、実費購入をするしかないという状況でした。私が知っている大学生の点字使用者の先輩のほとんどは、ワード文書を読み込める点字端末を使っていました。考えた末に、点字端末の購入費の補助をいただけるまで、たとえ学習環境が不便でも、西東京市に働きかけることにしました。それは、将来、西東京市で同じ悩みを抱える後輩が出ないようにしたいという思いや、福祉政策の勉強になるかもしれないという思いがあって決めたことでした。

西視協の発足に

関わることに決めた理由

まず私は、西東京市の障害福祉課の方にお手紙を手渡すところから働きかけを始めました。そこに書いたのは、私の大学での学習状況と、最新の点字端末が必要な理由でした。続いて、市のホームページから市長宛にメールを送ることができたので、障害福祉課に手渡した手紙の再編版を送信しました。そのメールには、視覚障がい者に点字ディスプレイの購入費を一部または全額給付した東京都の市区の一覧も付け加えました。しばらく後に返信がきましたが、要約すれば「日常生活用具等給付事業についての意見や要望が複数寄せられており、全てに答えられない」という内容でした。それからはどのように行動すべきか迷っていましたが、とある視覚障害者協会の理事の方と出会ったことでこの状況は進展しました。その方を通じて、西東京市市議会議員の方とお会いすることができたのです。

また理事の方は、個人個人で市に訴えてもあまり効果は期待できないとおっしゃっていました。そして最終的に、その方を中心に、西視協の準備会が開催されたのです。大学進学からこの準備会までの約1年間は、私にとって市に対する団体交渉権を持つ必要性を学ぶ期間でした。

西視協発足の流れ

3月から4月にわたって2回行われた準備会には、西東京市内在住の方々が10数名集まりました。その中には健常者の方もいらっしやり、西視協発足に尽力してくださいました。2回の会議に出て私を感じたことは、視覚障がいの参加者の多くが定年退職されている方々であったことです。つい数年前までは晴眼者だったという方もかなり多くの割合をしめていたと思います。そして、多くの方々が困っていることは、同行援護のガイドヘルパーサービスの利用時間の補助制度についてでした。また参加者の中には、私のように個人的に市に働きかけてきた方々もいました。市の視覚障がい者の福祉制度を改善するように求める声が複数あっても、それらがバラバラなままでは何も変えることはできないのだと感じた時

でした。この他にも、街づくりの問題や市内の視覚障がい者への情報保障の問題などに関心が寄せられ、西視協の発足が合意されました。

そこには来賓として、国会議員や市議会議員の方々が複数名いらっしやり、西視協は上々の滑り出しで発足しました。

これからの展望

私は主に3つの理由で、西視協の理事を引き受けました。まず1つ目は、点字端末の購入について、制度の改善を求め続けるためです。2つ目に、視覚障がい当事者や大学生として、市民団体に関わることは貴重な経験になると思ったからです。福祉について勉強している者としては、人々がどのように自治体に働きかけ生活の改善を実現していくのか、実情を1から知ることに興味があります。最後に3つ目は生意気ではありますが、この先、若者の会員が入会しやすくできたら良いという思いです。現在の西視協で30歳以下の会員は、私を含めて2人しかいません。20歳の私は、市内の若い視覚障がい者に広報ができたらいいなということを感じています。理事にならないかと言われた時には驚きましたが、

それはとても光栄なことだと感じています。

西視協を巡る経験から、私は声を上げ続ける重要性を再確認しました。困っていることは胸の内に留めず、声を上げ続けなければいつか解決の糸口が見つかるのではないのでしょうか。私の困りごとは点字端末を購入し、晴眼の学生と同等の学習環境を整えるために、なぜ高額の実費負担が必要になるのかということでした。

障がいがある理由で経済的な負担が求められ、そこに自治体間の差があることは悔しいという気持ちもありました。この思いで行動するうちに、西視協に辿り着きました。今のところ、

西東京市の制度は何も変わっていませんし、借用中の点字端末を返却する期限までに改善する保証もありません。しかし、これから制度の改善を団体として求めるとともに、市内の視覚障がい者がより生活しやすい環境づくりに貢献したいと考えています。

【引用】西東京市、2017年10月1日、「重度心身障害者(児)・難病患者等日常生活用具給付品目」、<https://www.city.nishitokyo.lg.jp/kenko-hukusi/syogaisyastien/dailylife/nichizoyogu.html> (2016年7月23日アクセス)

【出典】社会福祉法人視覚障害者支援総合センター 月刊『視覚障害』。一部、加筆・修正



青木さんと当センターとの関わり

青木さんの大学では、事前学習をしたのち、一定の期間にわたり体験学習を行う授業があり、その一環で当センターにて体験学習をしていただきました。今回、本号企画の打ち合わせに青木さんが加わってくださったことがきっかけとなり、「西東京市視覚障害者協会」のお話を聞きました。「西東京市視覚障害者協会」発足までの経緯や今後の展望について、社会福祉法人視覚障害者支援総合センター月刊『視覚障害』9月号に「寄稿」されている内容を一部、加筆・修正しています。(写真) 点字端末で読み書きをする青木悠弥さん。

ビスケットの家・元氣一番館に託す私の夢

坂巻 熙さかまきひろむ（社会福祉法人潤沢会理事長／淑徳大学名誉教授／毎日新聞社終身名誉職員）

坂巻熙さんは、ボランティア黎明期ともいえる昭和30年代に学生ボランティアグループ、エスパー口会を立ち上げた1人。卒業後は新聞記者の立場から障がい者問題に関わり、当センターの運営委員を17年務めていただきました。退職後に若手県内内村（現西和賀町）に障がい者施設「ワークステーション湯田・沢内」を設立、社会福祉法人「潤沢会」の理事に就任されます。15周年を機に開館した「元氣一番館」に託した想いについて、寄稿していただきました。

「ナンバー1も嬉しくない」

急速な人口減少により、消滅の危険性が岩手県内で一番高いと言われているのが西和賀町です。介護保険料も県内一番という、嬉しくないニュースもありました。

社会福祉法人「潤沢会」がこの地に誕生して16年。15周年の記念式典

の挨拶で、私は「これからの課題は、障がい者の高齢化と、高齢者の障がい化だ」と言いました。潤沢会は、さまざまな社会貢献活動をしてきました。独居高齢者へのお弁当の宅配、雪払い、学校給食のパンづくり、高校生の弁当おかず作り、病院の売店、コーヒーショップ。「農福連携」と言われる前から、休耕田を借り受けて米や野菜づくりをするなど、それなりにやってきた自負はあります。

およそ2人に1人が高齢者という町では、障がい者も戦力。法人目的を「人と自然に優しい地域づくり」としたのも、そのためです。

「ビスケットの家・元氣一番館」

ホット湯田駅を降りると、線路を挟んで木造の建物が目に入ります。15周年の記念事業として、長く放置されていた元営林署の空き家を手に入れ、1階をグループホームにし「ビスケットの家」と名付けました。西

和賀のソウルフードが「ビスケットの天ぷら」であり、いまこの町に必要なのは、町民同士のちよつとした助け合いの気持ち、「微助っ人」の気持ちが必要だと思っただけです。

その2階部分が改造中の「元氣一番館」。ここを、障がい者と地域の人びとが自由に集まって交流する場にしたと願ってつくりました。

我が国の福祉制度は、高齢者、障がい者、児童、女性、生活困窮者などそれぞれが縦割りに行われてきました。それを、地域福祉の視点で一括しようという、少々無茶な試みをしています。法律になくても必要ならやってみよう、だめならまたやり直せばいい、という考えです。

民主党政権の時、鳩山首相が言った「新しい公共」の概念。国民が行政と一緒にやって公共事業を行うことです。社会福祉法人は、国や自治体からのお金で利用者にサービスを提供しているだけでは不十分です。新しいニーズが出てくれば、それに対

応しなければならぬと思うからです。が、潤沢会だけでできることではありません。行政も、町の人も、西和賀町のために取り組まなければ、事業は終わってしまいます。

地域福祉とは、地域に暮らす人たち自身が、幸せに、元気に、満足して過ごせる町や村をつくることではないでしょうか。

「元氣一番館ですること」

①トレーニング場

元氣一番館で何をするのか。夢のような話もありますが、思いつくまま挙げてみます。

まず、健康維持活動。衰えをできるだけ食い止めるという活動です。

西和賀町では1年の3分の1は雪に覆われます。江戸時代の漢学者・高橋子績は『沢内風土記』の中でこの地を「天牢雪獄の地」と表現しました。今は車で移動はできますが、車のない高齢者や、運転のできない



ビスケットの家。元気一番館。長く放置されていた元営林署の空き家を改築した。

障がい者は外出ができません。

そこで、町内にある老人クラブとタイアップして、昼間使用していない施設の手で送迎します。体を動かさず、施設で作ったお弁当を食べていただく。利用者である障がい者と話すことで、お互いの理解と共感が生まれるでしょう。知らないことから誤解が生まれ、誤解を放置しておくという偏見になり、それが差別につながります。障がい者だけを集めて地域から隔離させるような施設であってはなりません。

健康づくりの教室を常設の場に、介護保険のサービスを受けられない高齢者や障がい者のための、特に冬場の体力づくりや交流の場になれば、と思います。これは、老人クラブの活性化にもつながるので、ぜひ実現させたいと社会福祉協議会も乗り気です。

② 図書コーナー「和と風と」

当初は図書館の分室を誘致する計画でした。足の便が悪い図書館から、月々、テーマを決めて蔵書の一部を借り出そうと考えました。ところが、図書館運営規定では、土日祝日や夜も利用できなくてはならない。当方の計画と合わないため、法人が所有している図書を開放し、私設図

書室にしようという計画変更しました。

体力維持活動に来た人や、電車待ちの西和賀高校生が気軽に立ち寄れる場にします。新聞や週刊誌、本はテーマ別に並べます。それが障がい者の仕事になれば、この上ない喜びです。

③ 制作物の展示

重い障がいのある生活介護グループは、絵画や書道の練習に取り組んでいます。作品の一部は西和賀市内病院に展示していますが、より多くの人に見ていただくために、作品の展示もします。町内の児童、生徒の作品も随時、展示したいと思います。これからは施設も学校も、地域に開かれた存在になるべきと考えるからです。

④ 遊びの場の常設

これまで不定期に開催していた親子が遊べる場を常設にします。そこに障がい者と職員も一緒に加われば、より多彩なプログラムが展開できるでしょう。

フランスの学者、ロジェ・カイヨワの著書『遊びと人間』には、人間にとって遊びは本質的なもので、人生にとって欠かせないものと書かれています。子どもだけではなく、障がい者人や高齢者も一緒に遊べる場



ワークステーション湯田・沢内の外観。

を夢見ています。

⑤ インターネットカフェ

インターネットカフェをもうけたいと思います。それとともに、パソコンやスマートフォンの活用講座なども考えています。

⑥ 生涯学習課との協力

駅前という地の利を生かし、町で行っている講座をここでもやってもらいます。会場費や資料代などが収入になれば、と思います。

⑦ 就労支援事業の場として

これまで障がい者の仕事は、効率の悪い手作業が主でしたが、これからはサービスの分野に手を広げたいと思っています。ワークステーション湯田・沢内では農作業や農産加工を主にしていましたが、ワーク農園で作った野菜や、地域の農家が提供する規格外の野菜を、ほぐれ野菜[®]などと名付け、ほぐれ野菜市を開く。また、日用品を売る店がないので、その販売も手掛けようと思います。

⑧ 地域の人との交流

囲碁、将棋、麻雀、カラオケなどができる場も用意します。利用者も私もカラオケが大好き。認知症の予防

にもなると言われるので、積極的に参加するつもりです。

■ 新しい事業の開拓を

ワークステーション湯田・沢内では開設当初からパンづくりをしています。民間の会社が、採算に合わないからとやめた学校給食のパンづくりを、地域貢献の意味で引き受けました。高収益の仕事ではありませんが、美味しいパンづくりに努めています。元氣一番館でも販売したいと思っています。

運営や維持管理費、職員や利用者の配置など、課題はあります。運営責任は潤沢会にあります。実際の運営は町や地域の人たちと一緒にやってみたいと思います。町の協力を得ながら、法人と地域の人で「運営・企画委員会」を作り、そこですべてを決めて、実行していくということです。

元氣一番館ができたのは、社会福祉法人「清水基金」から1000万円の助成があったからです。潤沢会にというより、過疎と人口減少、高齢化に悩む西和賀町に対する助成だと思っています。障がい者が町の元氣の担い手になる、という元氣一番館の趣旨に力添えをしてくださったとい

うわけです。

■地縁・血縁から、知縁・結縁へ

潤沢会は国や県、町からは、助成や補助金を受けていません。自分たちでできる限りの努力をすることが当たり前だと思っただけです。できないときは、みんなで助け合う。西和賀町にはもともとそういう風気があり、今も助け合いの精神や、地縁・血縁の結びつきが残っている土地柄です。

一方で、人と人との新しいつながりには必要です。私は「地縁・血縁」から「知縁・結縁」と言っていますが、地域社会に人と人とのつながりを網の目のように作ることが大切だと思います。知縁・結縁の1つとして、ボランティア・市民活動があります。

地域のすべての人が幸せに暮らせる町になるように、一人ひとりが小さな努力を積み重ねていけば、日本一幸せな町になるでしょう。生命尊重を掲げてきた西和賀町です。できないはずはありません。

■終わりに

元気一番館の運営は、若い世代に任せようと思います。創るより維持

する方が難しいことは言うまでもありませんが、ダメ元で精神で取り組んでもらいたいと思います。

最後に、設立以来、潤沢会を支え



坂巻 熙（さかまき・ひろむ）

てくれた役員、職員、地域の皆さま　また、地縁も血縁もないこの地に居に心より感謝を捧げます。さらに「雨を移し、10年間、施設長を務め、その二モ負ケズ、風ニモ負ケズ、暑サヤ後も相談役として私を支えてくれた冬ノ寒サニモ負ケズ」、ワークに通ってきくれた利用者一人ひとりに。妻・潤子に心からありがとう。

- ・ 昭和10年 東京都生まれ
 - ・ 昭和34年 早稲田大学政治経済学部卒業、毎日新聞社入社浦和支局社会部、「サンデー毎日」編集次長、TBSテレビコメンテーター、編集局編集委員
 - ・ 昭和59年 毎日新聞社論説委員（社会保障・社会福祉担当）
 - ・ 平成3年 毎日新聞社定年退職・終身名誉職員、淑徳大学社会学部教授、日本福祉大学客員教授、岩手県沢内村（現西和賀町）に障がい者施設「ワークステーション湯田・沢内」を設立、社会福祉法人「潤沢会」理事長
 - ・ 平成17年 淑徳大学総合福祉学部教授、同大学院教授
 - ・ 平成20年 淑徳大学名誉教授
- 過去の主な公職

- 【総理府】 社会保障制度審議会委員
 - 【厚生省】 人口問題審議会委員、生活環境審議会委員、年金審議会委員、身体障がい者福祉審議会委員、社会保険審査会参与など
 - 【東京都ほか】 障害者施策推進協議会委員、「福祉の街づくり」推進協議会副会長、社会福祉協議会理事、知的障害者権利擁護委員、東京ボランティアセンター運営委員、全国老人クラブ連合会評議員、日本テクノエイド協会評議員、千葉県・障害者施策推進協議会副会長、中国残留孤児援護基金評議員、昭和館運営有識者会議委員。在宅医療助成・勇美記念財団理事、社会福祉法人福利厚生センター理事、日本身体障がい者団体連合会顧問ほか
- 現在の主な公職

- 社会福祉「パール」理事、社会福祉法人「一粒会」評議員、社会福祉法人「天童会」評議員
- 著書

『どう生きるあなたのおした』（日本基督教団出版局）、『生きること生かされること共につくる福祉社会へ』（ぶどう社）、『高齢者ケアのニューウェーブ』（中央法規出版）、『社会保障年鑑』（健康保険組合連合会）、『親の世話 ヒトに任せてボランティア』（あけび書房）ほか

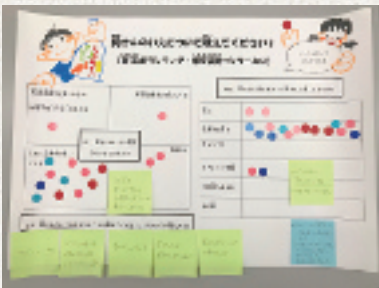
Vol.2 地域の居場所づくり調査

応援の輪を広げるための提言作成へ

昨今、市民による「地域の居場所」の活動が広がっています。その一方で、活動内容や運営方法は多岐にわたり、それぞれの活動には課題もみられます。そこでTVACでは、研究者や地域の中間支援組織の方々と研究委員会をつくり、「地域の居場所」に関わる皆さんの声を集め、活動の意義や地域にとっての役割をあらためて整理し、それらを広く共有したいと考えています。これまでは「地域の居場所」の活動ヒント集(写真①)を出版するなど広報、啓発に取り組んできました。



今年度は、「地域の居場所」の意義に加えて、これまでの調査からみえてきた課題の中から「人」「場所」「資金面」について、さらに掘り下げるべく、調査を実施しています。調査先として「岡さんのいえTOMO」、「お互いさまネットオリーブ」まちなかサロン「かみさぎ」にご協力をいただき、利用者や運営者の皆さん、関係機関へ、アンケートやヒアリングによって実状を伺っています。



調査先のご紹介

「岡さんのいえTOMO」

世田谷区にある民家を使った居場所です。2006年にオーナーの大叔母である岡さんの「この家子どもたちや地域のために役立てて」という遺言を活かし、活動がスタートしました。畳でくつろぎながら、多世代が交流できる場となっています。



「まちなかサロンかみさぎ」

中野区の「まちなかサロン」は、区民の自宅や区民活動センターなどを会場に、区民同士が気軽に集える「憩いの場」として中野区社会福祉協議会が呼びかけて輪を広げています。子育て中のお母さん方からシニアの世代などが集い交流するきっかけづくりを行っています。このうち、2カ所で活動する「まちなかサロンかみさぎ」(写真③)へおじゃまして、利用者の皆さんにお話を伺いました。



「お互いさまネットオリーブ」

歳をとっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けたいと長年、立川市で活動してきた「NPO法人高齢社会の食と職を考えるチャンプルーの会」。そのメンバーたちが、今までのつながりを活かして新たに立ち上げたのが「オリーブ」(写真④)という居場所の活動です。おしゃべりカフェなど曜日によって異なるプログラムに参加させていただいて、ヒアリング調査を行いました。

写真、上から順に、

- ①「地域の居場所」の活動ヒント集。中間支援組織向けに居場所づくりの実践的なヒントや事例が詰め込まれています。
- ②シールアンケート。小学生向けに頻度や目的を聞きました!駄菓子を買える場所として人気のようです。
- ③まちなかサロンかみさぎのランチ。バランスの摂れた献立に利用者さんも大満足。食事を介し、会話が弾んでいました。
- ④空き店舗を活用したオリーブ。火曜日に行われる「小物の会」では、楽しくおしゃべりをしながら、あまり布で様々なものを作っています。右の写真はブローチ。

つぶやき ブレイク

vol.09



『ヴィクトリア女王 最期の秘密』
ブルーレイ+DVD：3,990円+税
発売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント
※2019年10月の情報です。

さあ、話し合おう

私が持っているアフリカの布には文字がプリントされている。現地の言葉で「話し合う」が大切。さあ、話し合おう」という意味だと聞いた。

数年前、読書会のコミュニティに誘われたことがある。メンバーの1人が指定した本を各自で読み、SNS上のグループで感想や意見を言い合うというものだった。

最初に本を指定したのは私だった。選んだのは、平易な文章で書かれた心温まる小説。メンバーたちから「この手の小説はふだん読まないからなあ」という、ためらいの声があがった。期待外れの本だったのだと悟った。書きようのないコメントを苦し紛れに書くメンバーの優しさに、かえってみじめな気持ちになった。

その後、他のメンバーが指定した本は、詩や哲学、自然科学といったラインナップ。場にかざわしい気の利いたコメントを考えているうちに、話題が移ってしまうことが多々あった。メンバーの書く内容のレベルは高く、その掛け合いが白熱すると内容が理解できなく

なり、私はコミュニティに所属しながら傍観者になってしまった。

今ならば、「みんなの書く内容が難しいので、噛み砕いて説明して」と言えたと思う。また、メンバーの好みがどうあろうと自分が好きな作品を指定し、メンバーの反応を気にすることなく自分の感じたことを言うことができるかもしれない。ただし、おもしろくないければ当然、盛り上がらない。興味のない本でも前向きに読めるように、読むときの視点を提示したらどうだろうか。

たとえば、実話をもとにした映画（本ではないが）『ヴィクトリア女王 最期の秘密』と小説『夜間飛行』。時代も背景も異なるが、両者の主人公は、イギリス・インド10億の民を率いる女王と、文壇バーで銀座（つまり日本一）の女給（ホステス）という、トップの座にあった女性である。それと同時に、2人にはトップにありがちな「孤独」という共通項がある。

共通するものがあるから（精神的に）「上がる」人間と「上がれない」人間が存在する。それはなぜ

か。そんなことの意味交換をしてみたい。「精神的に成熟しているか否か」「それより信頼できる友の存在では」「じゃあ、どうやって親友を見つける？」「上に立つ人ほど、自分の気持ちを吐露するのは難しいよね」「そういう人の気持ちをどうやってひらくのか」……答えは出ずとも、考え、意見を出し合うことで、自分や周囲の人の課題に気づき、現実の世界で応用できることがあるかもしれない。

私の知るアフリカの人たちは、メールやSNSよりも電話や会って話すことを好む。私も、文字に頼らず、もっと人と話し合ってみよう。いつだって人と話し合うことは始められる。

（秋池智子）



『夜間飛行』
北迫薫 / 1,600円+税 / 新潮社刊

セルフヘルプ という力 (番外編)

東京ボランティア・市民活動センター (TVAC) では、当事者活動やセルフヘルプグループ (SHG) の設立・運営の相談に対応しています。その件数は年々増加しており、2018年度には、「当事者」相談や SHG に関する相談が、個人・グループ合わせて 2400 件以上も寄せられました。

今回は『セルフヘルプという力』の番外編として「グループ同士がつながること」をテーマに TVAC の取り組みを紹介します。

「グループ同士がつながること」

第 21 回

セルフヘルプグループ交流会のあゆみ

運営の情報交換がしたい

「会場が借りにくい」、「運営資金に困っている」、「生活と活動の線引きができなくなってきた」など、SHG 運営者の抱える悩みは様々あり、これらの多くは特定の分野やテーマの SHG に限った悩みではなく、多様な団体に共通する課題です。テーマや分野を越えて当事者団体の運営ノウハウや社会資源の情報などを交換し合うことができれば、多くのグループにとつて、助けとなります。

発達障害や精神疾患など、一部のテーマの当事者活動においては、団体同士の距離がとて近く、人や知恵が行き来して、結果的に運営を支え合うことにつながっています。また、団体をネットワーク化して、当事者の声を社会や制度政策に反映させようという動きもあります。しかしそういった場合でも、他の領域・テーマの団体となると、なかなか出会いにくい現状があるようです。

TVAC にも、「他の団体はどうしているのか知りたい」、「多様な SHG と情報交換してみたい」という相談が寄せられています。さらに運営以外にも「自分たち以外の『生きづらさ』を知りたい」、「他の人たちに SHG を始めた原点を聞いてみたい」という声が集まるようになり、SHG の交流会を開催するようになりました。

交流会には毎回、様々な障害・病気、暴力の被害、依存症、セクシュアルマイノリティ、「生きづらさ」を感じる人たち、介護者など多様な SHG の参加があります。緩やかなテーマでぎくばらんに交流しますが、「定期的に使える場所」や「上げられない参加費と足りない運営費の問題」、「増えない担い手」など、具体的な課題で盛り上がることも多くあります。終了後には「解決しなくていい」、「同じような悩みを持つと心強い」、「同じように頑張っている人が、同じように頑張っていることがわかった」、「異なる経験をしている人とも『助け合う場をつくる』こと、『自分も相手も助かっている』ことを目指していることが共通している」と気づいた」などの声が寄せられ、運営者同士が交流することで、お互いの励みになり、活動へのエネルギーを得る場になっていることが伝わってきます。

SHG 運営者の「孤独」

SHG 交流会を開催する中で、運営者には「ノウハウ」以外のニーズがあることも見えてきました。SHG 運営者の「孤独」です。

大抵の SHG はとても小さな規模で立ち上がります。SHG は、既存の団体から分かれたり、より一層細分化したテーマで新たに立ち上がる

ことが多いため、「自分に合ったものがほしい」と動き出した数人がコアになります。実際にはたった一人ということの方が多いかもしれません。団体運営の経験がなく、いきなり活動がスタートしてしまうこともあります。そういった場合でも、他のグループをヒントにできたり、ゆくり時間をかけて基盤を整えていくことができれば、それが大きな問題となることはないかもしれません。

しかし一方で、SHG に参加したい、相談したい、「こういうことをしてほしい」という当事者・市民のニーズはたくさんあります。立ち上がったばかりで運営基盤が整う前のグループにも、多くの期待や反応が寄せられます。それは、参加者の声だったり、人数の増加だったり、時



◆私たちは、なにを目指して当事者活動をしているのだろうか

- ・当事者活動は、共感と居場所、心のよりどころを増やしたくて続けている。自分自身の「居場所がなかった」「さみしかった」が原動力。
- ・寄り添い合って話すだけでなく、社会に向かって発信したい気持ちもある。自分たちの経験を社会の中で繰り返さないために…。
- ・一人ではできないことをグループになってやっていきたい。
- ・「社会へ想いを発信していきたい主催者」と、「参加だけでいい」「今は自分のことで精一杯」という参加者との間の温度差を感じることがある。しかし、仲間を排除したり追い出す訳にはいかないというジレンマがある。
- ・当事者が安心できる場をつくる SHG、社会に働きかける SHG、両方あっていい。人にも、団体にも、いろんなステージがある。

に昼夜を問わない SOS 電話や、クレームということすらあります。外からはグループの運営状態はわからないことが多いのですが、担い手が少ない状況は変わらず、ニーズだけが次々と寄せられることもありま

す。その結果、特定の人に負担が偏ったり、要望に応えるために無理に活動を広げたことに伴って収入と支出のバランスが崩れ、運営者の「持ち出し」が増えて生活を圧迫する事態になったり、人間関係にストレスや軋轢、しわ寄せなどが生じてしまいます。そして、疲弊しきって、活動を続けることができなくなってしまいうグループがたくさんあります。

逆に、活動はしているのに参加者が全然来ない場合もあります。完全にオープンにはしたくないけど、必要な人のところには情報を届けたい。…。そうした場合の広報や発信について、学べる機会や情報が少ないことも課題です。しかし、誰も来ない状態で、何年も場をひらき続けることには相当な労力とモチベーション、希望が必要になります。これも一人きりで続けるのは至難の業です。「孤独」は既存のグループだけの問題ではありません。1年を通じて数えきれないほどたくさん SHG・当事者活動が生まれていますが、同じくらいたくさん活動が終わっていきます。その理由は様々ですが、活動の限界を感じると同時に、運営者の「ひとりぼっち」という状況が加わります。SHG が壁にぶつかった時、運営者は活動を続けながら、さらには自身の生活をしながら、一人で活路を見出すしかないのです。そのような状況を「SHGには仲

間がいるはずなのに、孤独だ」と表現した方がいました。その「孤独」には「グループの中に、運営の話ができる人がいない」、「当事者仲間なのに『ホスト』と『ユーザー』の関係になってしまった」、「運営者としてのグチを言える環境がない」など、運営を経験した人の多くに共通する背景があります。

「つながる」面白さ

2019年6月2日、SHG 運営者の交流会「当事者同士横のつながりを深め、何を目指すのか？」が開催されました。この交流会は、これまで TVAC 主催の交流会に参加をしてきたことのあるいくつかの SHG が「自分たちで企画したい!」と、テーマを越えて一緒に相談を持ちかけてくれたところから始まりました。

過去の交流会でいろいろな団体と知り合って、「これだけいろいろな活動があることに驚いた」、「自分たちと違うと思っていた団体と共通点があった」という衝撃から、「知り合っって面白い」と感じたそうです。

企画メンバーと5回にわたる会議の中で企画をすすめ、当日は31グループ、60名が集まりました。「なにを目指してSHGをしているのか」、「SHG 同士がつながってできることを探ろう」などをテーマに語り合いました。上図で、その一部を紹介し

ます。

最初は「お互いの運営のヒントが得られれば…」という目的で開催していた交流会ですが、最近 SHG 主催によって開催されることも増えてきています。運営のことだけでなく、「自分たち以外の『生きづらさ』を知る機会になった」、「社会全体に目を向ける機会になった」という声を耳にすることも増えてきました。なにより、「SHG 運営者の居場所になっっている」との声からは、運営者の交流自体が共助的な意味合いをもちつつあるのではないかと感じることもあります。

そして、SHG 同士が知り合う中で、具体的に課題解決につながる「つながり」も生まれてきています。例えば、活動頻度などから一つの SHG では十分に要望に応えきれない方を、複数のグループで連携して受け止めることで、活動を無理やり拡大する必要がなくなったり、IT 関係が苦手なグループの web サイトを、得意な SHG が作成したりなど、可能性は無限大です。

TVAC では、これからも相談・情報発信等の事業を通じて、社会全体が SHG への理解を深め、市民一人ひとりが当事者として SHG の活動を行いやすい環境づくりをすすめていきます。

(相談担当専門員 森玲子)

読者の声

～本誌361号より～

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆特集…ともに生きる社会をめざして
多民族・多文化共生社会のこれから

◆かけはしプロジェクトさんの活動、地道な地域へのプレゼンには敬意を表します。昨今の嫌韓・嫌中の煽り方には目に余るものがあります。特にテレビはひどすぎる。雑誌のひどいヘイト記事も記憶に新しい。毎日次から次へと出てくるエライ人の失言やらヘイトスピーチやらでうんざりする中、一筋の光明を見る思い。

◆海外出身の方が多い地域に在住しているの、外を歩けば外国の方が常にいる環境です。でもほとんど交流はない。「外国人が騒々しい」とかよく耳にしますが、もっと交流の機会を持って理解を深められたら壁がなくなるのかも。

◆思い立ったがバラ日…
アフリカヘリテイジコミュニティ
パフォーマンスボランティア

◆日本の文化、他国の文化を上手に共有できる機会が増えればと思います。

◆2018年度の相談より
もっと気軽にボラセンに相談してもいいのかな、と思いました。

◆セルフヘルプという力…
関東ウェーブの会
(関東躁うつ病当事者会)

◆記事を読んでいると、ネットやSNSの普及ってありがたいと感じています。躁うつの方も簡単なことではないでしょうが、ネットなどを利用し、少しでも孤独・孤立から解放されたらうれしいです。

◆いいものみい〜つけた!…
夢ふうせん

◆インスタ栄えという言葉が流行っている時代ですが、私はこのような素朴な写真の方がいいね!です。頑張ってください。

◆障害のある方々の持ち前の力を、地域の活性化につなげていく活動があるということ、この記事で知りました。

◆TVAC News

◆私の住む地域は先日の台風で被災しました。誰が困っていて何が必要なのか、状況把握ができない時間が長過ぎました。災害経験がなかった地域だけに、対応の遅さが目立ち、地域の方々の助け合いの重要性を感じました。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<http://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室	会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料 ※会議室AB通し(80人)
貸出機材 申込み	印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)
飯田橋駅下車

ネットワーク

は、
ボランティア・市民活動を広げ、
応援する情報誌です!

【次回予告】2019年11月下旬発行予定

特集 **学校のいま**
市民のかかわり (仮題)

発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈(興望館)

上杉貴雅(オレンジフラッグ)

江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

齋藤啓子(武蔵野美術大学 造形学部教授)

シュール大学 社会学ゼミ(東京シュール シュール大学)

中原美香(リスク・マネジメント・オフィス)

まつばらけい(フリーライター)

渡戸一郎(明星大学名誉教授)

編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: (株)丸井工文社

デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター / (株)丸井工文社

表紙イラスト: フローラル信子

2019年9月20日発行(通巻No.362)

ISBN 978-4-909393-16-6 C2036

371円+税

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



いいもの みい〜つけた!



このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
21

社会福祉法人 はなゆめ



1

「社会福祉法人はなゆめ」は、三鷹市内で障害福祉サービス6事業所を運営し、主に知的障がいの方々の支援をおこなっています。三鷹にゆかりのある太宰治のロゴをモチーフとした人形焼や刺繍ハンカチは、三鷹のおみやげ「TAKA-1」の認定を受け、みたか都市観光協会やイベント等でも販売され、全国の太宰ファンにとっても好評です。なお、自主製品のアンテナショップ「星と風のカフェ」（三鷹駅から徒歩7分）では、太宰商品の他、アクセサリや布小物なども販売しています。カフェでは、かきくけコーヒーも取り扱っていますので、ぜひご賞味ください。



2

社会福祉法人 はなゆめ

所在地 〒181-0004 東京都三鷹市新川3-21-19
はなはなテラス1F

TEL 0422-45-8787 FAX 0422-45-8788

E-mail info@hana-yume.jp

HP <http://www.hana-yume.jp>

1 プラ版とレジンを使ったアクセサリ。すべて一点もの。

2 もっちり生地に甘さ控えめな粒あんが特徴。

3 生豆を一粒一粒厳選し、自家焙煎しています。

4 普段使いから贈り物まで、吸収性も抜群の刺繍タオルハンカチです。



3



4



Sampo Japan
Nipponkoa
Welfare Foundation

(公財) 損保ジャパン日本興亜福祉財団

2019年度主な助成金の募集(公募)

社会福祉分野で活躍するNPOへの助成などを通じて、
地域福祉の向上に貢献することを目指しています。

事業名 (募集時期)	事業の内容	対象となる団体 対象地域・助成金額
<p>本年度は終了しました</p> <p>自動車購入費助成 (6/3~7/12)</p>	自動車を購入する際の資金を助成	<ul style="list-style-type: none"> ・特定非営利活動法人 ・東日本地区に所在する団体 (2018年度は西日本地区) ・1件120万円上限(総額1,200万円)
<p>本年度は終了しました</p> <p>NPO基盤強化資金助成 住民参加型福祉活動資金助成 (6/3~7/19)</p>	地域住民が主体となって、包括的な支援を行なう活動に必要な資金を助成	<ul style="list-style-type: none"> ・5人以上で活動する営利を目的としない団体、法人格の有無は不問(社会福祉法人は除く) ・西日本地区 (2018年度は東日本地区) ・1団体30万円上限(総額450万円)
<p>NPO基盤強化資金助成 組織および事業活動の強化資金助成 (9/2~10/11)</p>	「組織の強化」と「事業活動の強化」に必要な資金を助成	<ul style="list-style-type: none"> ・特定非営利活動法人、社会福祉法人 ・西日本地区に所在する団体 (2018年度は東日本地区) ・1団体70万円(総額1,000万円)
<p>NPO基盤強化資金助成 認定NPO法人取得資金の助成 (9/2~10/11)</p>	認定NPO法人取得に必要な資金を助成	<ul style="list-style-type: none"> ・認定NPO法人の取得を目指す社会福祉分野の特定非営利活動法人 ・日本全国 ・1団体30万円(総額450万)



自動車購入費助成

新しい自動車でのお迎えが楽しみ♪



組織および事業活動の強化資金助成

作業所新築にともなう事務室設備でネット注文拡大!

住民参加型福祉活動資金助成

お父さんと地域の
人たちが一緒に
日曜大工♪



認定NPO法人取得資金助成

子どもたちの心身ケアや
遊び場を提供。
認定取得により地域の
信頼強化に!



損保ジャパン日本興亜福祉財団Web ⇒ <https://www.sjnkwf.org/>

ISBN978-4-909393-16-6 C2036 ¥371E